日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第 136 号　2017 年 9 月

大学生の他者軽視傾向と自己形成意識及び自己変容の志向性
——相関関係・因果関係の分析から——[1]

小　平　英　志

Abstract

Correlations and causal relationships among undervaluing others, self-formation, and self-change in Japanese university students were investigated. In Study 1, university students（n＝163）completed scales that assessed undervaluing others, self-esteem, sense of self-formation, and intention for self-change. Results indicated a significant negative correlation between undervaluing others and imitation-oriented self-change defined as the will to change and agree with close others. This result was replicated in Study 2 with a different sample of undergraduates（n＝298）. Moreover, in study 3, structural equation approach with cross-lagged models and synchronous effects models were conducted on one-year longitudinal data（n＝161）. Results suggested a significant covariance between undervaluing others and imitation-oriented self-change at Time 1. However, there were no significant causal effects among these variables. The meaning of undervaluing others in the development of young adults was discussed.

Keywords：undervaluing others, assumed-competence, sense of self-formation, intention for self-change, youth and adolescence
キーワード：他者軽視，仮想的有能感，自己形成意識，自己変容の志向性，青年期

仮想的有能感とは，他人を軽視することによって見せかけの高揚感を得る心理的傾向を捉えるために提唱された心理学的構成概念である．速水・木野・高木（2004）は，仮想的有能感を“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価，軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義している．仮想的有能感の測定に用いられる他者軽視傾向について，横断的比較によって年代差を検討した Hayamizu, Kino, & Takagi（2007），速水（2012）は，青年期前期である中学生や高校生で他者軽視の傾向が強く，その後，成人期に向

かって一度は減少するものの，老年期に向かって再び上昇する傾向が見られることを報告している．速水（2006）は，他者軽視が現代的な競争社会の中で生きていくひとつの術として，現代の人々に身につけられた心理的傾向であることを指摘している．

これまでの仮想的有能感，他者軽視に関する実証的研究では，主に，①他者軽視傾向と他の心理的傾向との相関関係の検討，②他者軽視と自尊感情を組み合わせた有能感タイプに基づいた比較，の2つのアプローチが見られる．前者は他者軽視尺度（仮想的有能感尺度）を他の心理尺度と同時に対象者に実施し，その相関関係や仮説的な因果モデルを統計学的に検討したものを指す．一方で後者では，同様の調査を実施した後に，他者軽視傾向の高低，自尊感情の高低から，対象者を4つの有能感タイプに分類する（Figure 1）．4つの有能感タイプとは，他者軽視と自尊感情がともに低い萎縮型，他者軽視が高く自尊感情が低い仮想型，他者軽視が低く自尊感情が高い自尊型，他者軽視と自尊感情がともに高い全能型である．他者軽視が高く自尊感情が低い仮想型は，他者軽視による自己高揚は起きているものの真の有能感が得られていない個人であると解釈されている．仮想型は，仮想的有能感の概念上，最も注目される類型であり，後者の検討では，この仮想型の特徴を見出すことを目的とする研究が大半を占める．これまでの研究では，上記の2つのアプローチの両方の検討を試みているものも多い．

他者軽視との相関関係や，有能感タイプによるこれまでの検討からは，他者軽視傾向の高い個人が様々な側面で不適応状況を呈することが明らかにされてきている．日常生活で敵意を感じやすく，その程度が変動しやすいこと（小平・小塩・速水，2007），学習において努力することが効果的だと考えず（速水・小平，2006），友人や教師に援助要請を行わないこと（小平・青木・松岡・速水，2008），将来の就職に対して拘束されるイメージを持ち，希望を持てない傾向にあること（杉本・速水，2012）などが明らかになっている．

また一方で，他者軽視傾向が青年期の段階的な社会参加にポジティブな影響を及ぼすという知見も得られている．大学入学後に他者軽視傾向が増加した学生の方が，サークルや部活動への積極的参加が見られること（Kodaira, 2016），自尊感情が低く他者軽視傾向が高い「仮想型」の青

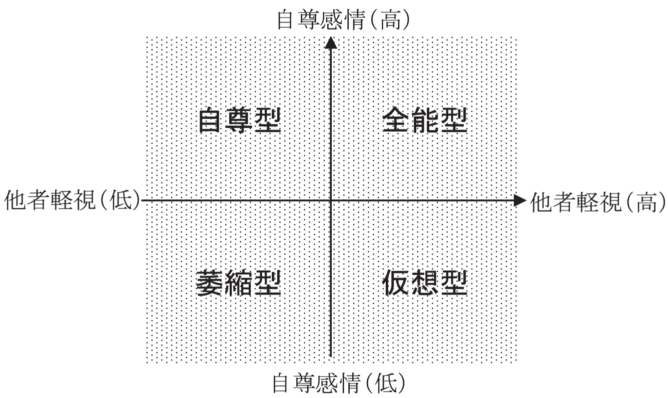

Figure 1　有能感タイプ（速水・小平，2006）

年たちは，現代社会を否定的にとらえつつも，社会の競争の側面や序列化に過敏に反応しており（小平，2012），自尊感情も他者軽視もともに低い「萎縮型」の青年よりも動機づけが高いこと（速水・小平，2006）なども示されている．特に青年期は感情の起伏が激しく，劣等感，葛藤，委縮などの自我の状態を経験しやすいと言われるが（西平，1990），この発達段階における他者軽視の特徴や機能について詳細を明らかにしていくことは，現代的な青年を理解していく上で有用な知見となろう．

青年期の発達課題の観点からは，青年の生活の中心となるのは試行錯誤による役割実験であるとされる（山本，1984）．様々な種類の集団に身を置き，異なる役割を実験（試行）的に経験することで，自身のあり方の可能性を模索していく．青年たちはこの役割実験を通して自己を形作り，やがて青年期の終わりに，就職という形で将来の選択を行うことを求められるのである．このような青年期の自己を形成するプロセスは，従来から，自己形成や自己変容といった概念で研究が行われてきた．これまでの仮想的有能感，他者軽視研究では，アイデンティティ達成やエリクソンによる心理社会的発達の諸概念との関連はいくつか検討されているが（例えば，伊田，2012），具体的にどのような自己を形成したり，志向したりしていくかといった，自己形成や自己変容の観点から検討したものは見られない．

本研究では，就職を控え，本格的な社会参加への過渡期である青年期後期の大学生を対象に，自己形成への意識（自己形成意識）や自己変容の願望（自己変容の志向性）について，他者軽視との関連（相関関係および因果関係）を検討する．また，有能感タイプによって差異がある可能性についても考慮し，他者軽視と自尊感情の交互作用についても検証を行いたい．具体的には，下記の 3 つの調査研究による検証を行う．まず研究 1 では，他者軽視と自己形成意識，自己変容の志向性との関連を検討し，他者軽視と自尊感情の交互作用についても検討を行う．研究 2 では，別の大学生サンプルの分析を通して，研究 1 で見出された相関関係の再現性について検証を行う．さらに研究 3 では，1 年間の縦断データを用い，研究 1，研究 2 で見出された関連の因果関係について検証を行う．

研究 1

研究 1 では，大学生の他者軽視および自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との関連を検討することを目的とする．相関関係を検証するとともに，他者軽視と自尊感情の交互作用の効果の有無についても検討を行う．

方法

調査対象　中部地方の A 私立大学の 2 つの学科に所属する大学生 163 名（男性 73 名，女性 90 名）を対象に調査を実施した．対象者の平均年齢は 19.54 歳（標準偏差 0.87）であった．

調査内容　a）他者軽視尺度　Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan（2004）の仮想的有能感尺度

11 項目を用いた．“自分の周りには気のきかない人が多い”，“他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる”等の項目について，「全く思わない」から「よく思う」までの 5 件法で回答を求めた．

b）自尊感情尺度　Rosenberg（1965）の自尊感情尺度 10 項目の日本語版（山本・松井・山成，1982）を用いた．“少なくとも人並みには，価値のある人間である”，“色々な良い素質をもっている”等の項目に対して「あてはまらない」から「あてはまる」までの 5 件法で評定を求めた．

c）自己形成意識尺度　小平（2002）の拡大的形成（5 項目，“今までやったことのないようなことに挑戦していきたい”等），充足的形成（4 項目，“人から言われたことは二度と言われないように気を付けている”等）の 2 下位尺度を使用した．充足的形成については，一部わかりやすい表現に修正した．「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた．

d）自己変容の志向性尺度　千島（2014）の自己変容の志向性尺度を用いた．この尺度は，一新志向（“以前から成長していない自分を変えたいと思う”等），懐古志向（“今の自分を以前のような自分に変えたい”等），改善志向（“自分の悪いところを直したい”等），確立志向（“真の自分に出会えるように変わりたい”等），全面変容志向（“自分という人間をガラリと変えたいと思う”等），展望志向（“将来のことを考えると，このままの自分ではいけないと思う”等），憧憬志向（“自分があこがれている人を見本にして自分を変えたい”等），変容追求志向（“いつも変化していたい”等），模倣志向（“周りにいる人に合わせて自分を変えたい”等）の 9 下位尺度（各 4 項目）からなる．「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた．

質問紙にはこの他，大学生活（部活動・サークル活動，ボランティア，アルバイト等）を尋ねる質問が含まれていたが，本研究では分析対象としなかった．

調査手続き　心理学関連の授業で質問紙の配布，回答，回収を行った．この調査は縦断研究の一部であり，質問紙の最後に，データのマッチングのために学籍番号を記入する欄を設けた．個人情報はデータ結合後に速やかに削除されることを説明し，縦断調査への協力が可能な場合に学籍番号を記入するように求めた．調査は 2015 年 6 月に実施された．なお，調査に先立ち，著者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を得た．同じ質問紙を実施した研究 2，研究 3 も同様であった．

結果と考察

各尺度の信頼性，基礎統計量　各尺度について，先行研究の尺度構成に従って α 係数を算出したところ，.64 から .88 の値が得られた．$\alpha = .70$ を下回ったのは自己形成意識尺度の充足的形成のみであり，α 係数が .64 であること，4 項目の尺度であることから，以降の分析に支障ないと判断された．平均値（標準偏差）を算出したところ，他者軽視が 29.87（6.93），自尊感情が

28.11（7.38），自己形成の拡大的形成が 20.22（3.89），充足的形成が 15.10（2.69）であった．自己変容の志向性尺度の平均値（標準偏差）は，一新志向が 13.52（3.79），懐古志向が 8.74（3.56），改善志向が 16.23（3.10），確立志向が 13.37（3.90），全面変容志向が 11.12（4.21），展望志向が 15.64（3.42），憧憬志向 13.35（4.04），変容追求志向が 11.52（3.94），模倣志向が 9.54（3.20）であった．

相関関係　他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関係数を算出した（Table 1）．他者軽視と有意な相関関係が確認されたのは，模倣志向（r=-.25）のみであり，一新志向との負の関連（r=-.14）も有意傾向であった．自尊感情とは，拡大的形成（r=.19），情景志向（r=.17）が正の有意な相関係数を示し，一新志向（r=-.32），確立志向（r=-.16），全面変容志向（r=-.33），展望志向（r=-.16）との負の相関係数も有意であった．また，自尊感情と模倣志向の負の相関係数（r=-.13）が有意傾向であった．なお，他者軽視と自尊感情の相関係数は r=.05（p=.56）であり，ほとんどの先行研究と同様に，有意な相関関係は確認されなかった．

交互作用項を含めた階層的重回帰分析　他者軽視と自尊感情との交互作用の効果が見られるかどうかを検証するため，階層的重回帰分析を実施した．まず，第 1 ステップに他者軽視と自尊感情を投入し，第 2 ステップに交互作用項（他者軽視と自尊感情の標準化得点の積）を投入した．自己形成意識尺度，自己変容の志向性の各下位尺度を目的変数とする階層的重回帰分析を行った結果が Table 2 である．交互作用項はいずれの目的変数でも有意ではなく，他者軽視と自尊感情の交互作用は確認されなかった．

以上，他者軽視との有意な相関関係が示されたのは，自己変容の志向性の模倣志向のみであっ

Table 1
他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関関係（研究 1）

	他者軽視	自尊感情
自己形成意識		
拡大的形成	-.03	.19 *
充足的形成	-.09	.13
自己変容の志向性		
一新志向	-.14 †	-.32 ***
懐古志向	-.02	-.04
改善志向	-.04	-.03
確立志向	-.02	-.16 *
全面変容志向	.02	-.33 ***
展望志向	-.12	-.16 *
憧憬志向	-.13	.17 *
変容追求志向	.09	.12
模倣志向	-.25 **	-.13 †

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

Table 2
交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果（研究 1）

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用項	
自己形成意識				
拡大的形成	-.02	.19 *	.02	.04
充足的形成	-.09	.13 †	.04	.03
自己変容の志向性				
一新志向	-.12	-.31 ***	.03	.12
懐古志向	-.01	-.03	.04	.00
改善志向	-.02	-.04	-.03	.00
確立志向	.01	-.17 *	-.06	.03
全面変容志向	.05	-.34 ***	.01	.12
展望志向	-.11	-.15 †	.06	.04
憧憬志向	-.13 †	.17 *	.01	.04
変容追求志向	.10	.13	.11	.04
模倣志向	-.24 **	-.13	.03	.08

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

た．模倣志向は，「周りの他者に合わせて自分を変えたいという気持ち」から成る自己変容の志向性であるとされる（千島，2014）．他者を軽視する傾向が，このような自己変容の志向性と負の相関関係にあることは，経験的にも納得のいく結果であった．一方で，もう一つの他者志向的な自己変容である憧憬志向については，他者軽視と有意な関連は見られなかった．憧憬志向は，「あこがれている人のようになりたいという気持ち」から成り，模倣志向とともに「他者」の大カテゴリーに分類される自己変容の志向性である（千島，2014）．他者を軽視することと，あこがれや尊敬の念を抱く対象を自己の目標として目指すことは，別の傾向であると考えてよいようであった．また，交互作用については有意な効果は確認されず，自己形成意識や自己変容の志向性については，有能感類型による差異として特徴的なものは見られないと考えられた．さらに自尊感情との関連では，自尊感情が高いほど拡大的形成や憧憬志向が高く，自分自身の可能性を広げる自己形成を目指したり，あこがれの存在に近づこうとする傾向が高い様子がうかがえた．さらに自尊感情は一新志向，全面変容志向，展望志向と負の有意な相関関係にあり，自尊感情が低いほど，今現在の自分自身を一新したい，全面的に変えたいという気持ちが強く，将来も現在の自分であり続けることに不安を感じている傾向が見られた．さらに確立志向とも負の相関関係が有意であり，自尊感情が低いほど，確かな自分を確立したいと願う傾向にあることも明らかとなった．千島（2014）では，自尊感情と懐古志向，一新志向，憧憬志向，確立志向，模倣志向，全面変容志向，展望志向との間に有意な負の相関係数を見出している．本研究では，懐古志向と有意な関連が見られなかった点，模倣志向の負の関連が有意傾向であった点，憧憬志向が負の有意な相関係数を示した点で異なっていたが，それ以外については同様の負の相関関係が確認された．

研究 2

研究 1 で得られた結果の再現性について，研究 1 とは別の対象者に調査を実施することで検証を行う．研究 1 と同様に相関関係及び他者軽視と自尊感情の交互作用の効果を検証する．

方法

調査対象　九州地方の B 私立大学および関東地方の C 私立大学に通う大学生 298 名（男性 203 名，女性 89 名，不明 6 名）を対象に調査を実施した．平均年齢は 19.27 歳（標準偏差 2.09）であった．

調査内容　実施された質問紙は研究 1 と同様のものであった． a）他者軽視尺度（Hayamizu et al., 2004），b）自尊感情尺度日本語版（山本・松井・山成，1982），c）自己形成意識尺度（小平，2002），d）自己変容の志向性尺度（千島，2014）

調査手続き　心理学関連の授業で配布，回答，回収を行った．なお，研究 1，研究 3 とは異なり，研究 2 では学籍番号を記入する欄を設けなかった．調査は 2016 年 10 月に実施された．

結果と考察

各尺度の信頼性，基礎統計量　研究 1 と同様に，まず，各尺度の α 係数，基礎統計量の確認を行った．研究 1 と同じく，自己形成意識尺度の充足的形成のみが $\alpha=.63$ とやや低い値を示したものの，他の尺度については $\alpha=.70$ を上回っていた（$\alpha=.76$ ～ .90）．いずれも分析に支障がないと判断された．平均値（標準偏差）は，他者軽視が 30.55（6.83），自尊感情が 29.00（6.42），自己形成意識の拡大的形成が 20.60（3.97），充足的形成が 15.57（2.55）であった．自己変容の志向性尺度では一新志向が 13.41（3.95），懐古志向が 9.16（3.78），改善志向が 16.86（2.84），確立志向が 14.02（3.71），全面変容志向が 11.25（4.17），展望志向が 15.65（3.73），憧憬志向が 14.30（3.72），変容追求志向が 12.63（4.07），模倣志向が 10.33（3.47）であった．

相関関係　研究 2 のデータを用いて相関係数を算出したのが Table 3 である．他者軽視と有意な相関関係が確認されたのは，模倣志向（$r=-.22$）のみであった．自尊感情とは，有意な正の相関係数を示したものは見られず，一新志向（$r=-.42$），改善志向（$r=-.16$），確立志向（$r=-.24$），全面変容志向（$r=-.41$），展望志向（$r=-.31$），憧憬志向（$r=-.12$），模倣志向（$r=-.16$）との間に有意な負の相関関係が見られた．他者軽視と自尊感情の間の相関係数は $r=.04$（$p=.50$）であった．

交互作用項を含めた階層的重回帰分析　さらに他者軽視と自尊感情の交互作用の有無を確認するために，研究 1 と同様に階層的重回帰分析を行った．結果を Table 4 に示す．研究 1 と同様に，いずれの目的変数についても有意な交互作用は確認されなかった．

以上，研究 2 では，研究 1 とは別の地域の大学に通う学生を対象に調査を実施したが，いくつか同様の結果を得ることができた．第一に，他者軽視に関して，自己変容の志向性の模倣志向と

Table 3
他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関関係（研究 2）

	他者軽視	自尊感情
自己形成意識		
拡大的形成	-.05	.02
充足的形成	.02	.06
自己変容の志向性		
一新志向	-.06	-.42 ***
懐古志向	.01	.00
改善志向	-.03	-.16 **
確立志向	-.02	-.24 ***
全面変容志向	.02	-.41 ***
展望志向	.03	-.31 ***
憧憬志向	-.07	-.12 *
変容追求志向	.03	-.03
模倣志向	-.22 ***	-.16 **

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 4
交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果（研究 2）

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用項	
自己形成意識				
拡大的形成	-.05	.02	.00	.00
充足的形成	.02	.07	-.03	.01
自己変容の志向性				
一新志向	-.04	-.42 ***	-.06	.17
懐古志向	.01	-.01	.01	.00
改善志向	-.02	-.14 *	-.01	.02
確立志向	-.01	-.25 ***	-.05	.06
全面変容志向	.04	-.42 ***	-.01	.17
展望志向	.05	-.31 ***	-.03	.10
憧憬志向	-.07	-.12 †	-.05	.02
変容追求志向	.04	-.04	.01	.00
模倣志向	-.21 ***	-.18 **	-.10 †	.08

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

の間に有意な相関関係が確認された点である．研究1，2のいずれも r = -.20 程度の関連ではあるものの，他者軽視と模倣志向の負の相関関係は，再現性の高い結果である可能性が示唆された．他者を見下したり，軽視したりする傾向が高いほど，模倣による自己変容を志向しない傾向にあることは信頼性の高い結果であると考えられよう．また，交互作用が見られなかった点，自尊感情との関連で，一新志向，確立志向，全面変容志向，展望志向，模倣志向（研究1では有意傾向）と負の相関関係にあることも研究1と同様に示された．一方で，自尊感情については，あくまで有意性の判断に基づいてではあるものの，研究1との差異も見られた．研究1で確認された拡大的形成との正の関連が確認できず，研究1で有意ではなかった改善志向との負の相関が有意であった．また，憧憬志向については，研究1では正の有意な関連が見られたのに対し，研究2では負の有意な関連が確認された．これらはいずれも r=.20 未満の相関係数が示されていた箇所であり，関連しているとは断言しにくい箇所でもあった．

研究3

研究1の対象者に対して1年後に調査を実施し，①研究1，研究2と同様に，他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関関係と交互作用の影響を検証する．また，②他者軽視と模倣志向について，研究1のデータと結合した縦断データを用い，交差遅延効果モデルと同時効果モデルによる因果関係の検証を行う．

方法

調査対象　研究1の対象となったA私立大学の2つの学科に所属する大学生177名（男性78名，女性99名）に調査を実施した．平均年齢は20.58歳（標準偏差0.87）であった．

調査内容　実施された質問紙は研究1と同じものであり，下記の4つの尺度が含まれていた．

a）他者軽視尺度（Hayamizu et al., 2004），b）自尊感情尺度日本語版（山本・松井・山成，1982），c）自己形成意識尺度（小平，2002），d）自己変容の志向性尺度（千島，2014）

調査手続き　心理学及び教育学に関連する授業で配布，回答，回収を行った．研究1と同様に質問紙の最後に，データのマッチングのために学籍番号を記入する欄を設けた．個人情報はデータ結合後に速やかに削除されることを説明し，縦断調査への協力が可能な場合に学籍番号を記入するように求めた．調査は研究1の約1年後である2016年7月に実施された．

結果と考察

各尺度の信頼性，基礎統計量　研究1，研究2と同様に，各尺度の α 係数，基礎統計量を確認した．研究1，研究2と同様に，自己形成意識尺度の充足的形成が α =.66 と相対的に低い値を示したが，他の尺度は α =.74 〜 .90 であった．いずれも以降の分析に支障はないと判断された．研究3のデータの平均値（標準偏差）は，他者軽視が29.56（6.49），自尊感情が28.21（7.68），

拡大的形成が 20.06（3.91），充足的形成が 15.36（2.61）であった．自己変容の志向性では，一新志向が 13.38（3.86），懐古志向が 8.63（3.37），改善志向が 16.32（2.93），確立志向が 13.64（3.74），全面変容志向が 10.73（4.01），展望志向が 15.48（3.38），憧憬志向が 13.31（3.61），変容追求志向が 11.55（3.57），模倣志向が 10.05（3.09）であった．

相関関係　研究 3 の調査データから他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関係数を求めたものが Table 5 である．他者軽視は，自己形成意識の充足的形成（r=-.18），自己変容の志向性の改善志向（r=-.15）と有意な負の相関係数を示した．また，他者軽視と模倣志向の間には有意傾向の負の関連が見られた（r=-.13）．自尊感情とは，拡大的形成（r=.29）のみが正の相関係数を示し，一新志向（r=-.52），確立志向（r=-.40），全面変容志向（r=-.49），展望志向（r=-.41），模倣志向（r=-.25）がいずれも負の相関係数を示した．なお，他者軽視と自尊感情の相関係数は r=.03（p=.74）であった．

交互作用項を含めた階層的重回帰分析　研究 1，研究 2 と同様に，階層的重回帰分析を用いて，他者軽視と自尊感情の交互作用の有無を確認した．結果を Table 6 に示す．研究 1，研究 2 と同じく，全ての目的変数について，有意な交互作用は確認されなかった．

因果関係の検証　研究 1，研究 2 の結果から，再現性が高いと考えられた他者軽視と模倣志向の関連について，2 時点の縦断データによる因果関係の検証を行った．2 回の調査（研究 1 及び約 1 年後に実施された研究 3）のいずれかで学籍番号を記入し，マッチングが可能であった対象者は 161 名（うち 109 名が 2 回の調査の両方に回答）であり，これをもとに 2 時点のデータを結合し縦断データを構成した．以降，研究 1 の調査データを Time 1，研究 3 の調査データを Time 2 と表記する．岡林（2006）を参考に，共分散構造分析による交差遅延効果モデル（Figure 2）

Table 5
他者軽視，自尊感情と自己形成意識，自己変容の志向性との相関関係（研究 3）

	他者軽視	自尊感情
自己形成意識		
拡大的形成	.01	.29 ***
充足的形成	-.18 *	-.02
自己変容の志向性		
一新志向	.01	-.52 ***
懐古志向	.04	.01
改善志向	-.15 *	-.07
確立志向	.05	-.40 ***
全面変容志向	.08	-.49 ***
展望志向	.01	-.41 ***
憧憬志向	.01	-.11
変容追求志向	.11	.11
模倣志向	-.13 †	-.25 ***

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

Table 6
交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果（研究 3）

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用項	
自己形成意識				
拡大的形成	.00	.29 ***	.01	.08
充足的形成	-.18 *	-.01	-.02	.03
自己変容の志向性				
一新志向	.03	-.52 ***	.07	.29
懐古志向	.04	.01	.02	.00
改善志向	-.15 *	-.06	.02	.16
確立志向	.05	-.40 ***	.03	.03
全面変容志向	.09	-.48 ***	.03	.25
展望志向	.01	-.40 ***	.09	.18
憧憬志向	.01	-.10	.12	.03
変容追求志向	.09	.13 †	.12	.04
模倣志向	-.12 †	-.26 ***	.01	.08

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

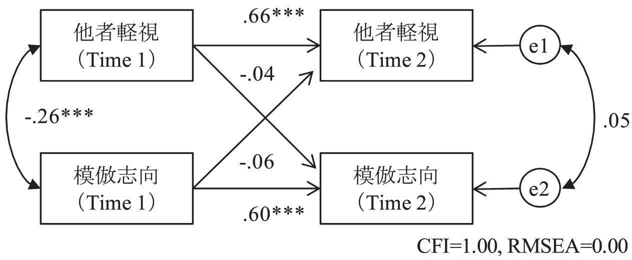

Figure 2　他者軽視と模倣志向の因果関係（交差遅延効果モデル）

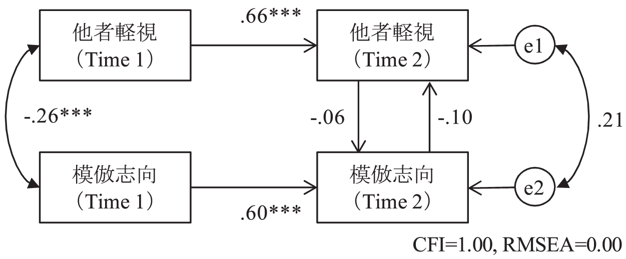

Figure 3　他者軽視と模倣志向の因果関係（同時効果モデル）

及び同時効果モデル（Figure 3）の2つの因果モデルの検証を行った．分析にはMplus ver.7.4を使用し，欠損値の補完には完全情報最尤法を用いた．

まず交差遅延効果モデルについては，他者軽視のTime 1からTime 2への効果，模倣志向のTime 1からTime 2への効果を仮定し，Time 1の他者軽視からTime 2の模倣志向，Time 1の模倣志向からTime 2の他者軽視への効果を仮定した．Time 1の他者軽視と模倣志向の間と，Time 2の他者軽視と模倣志向の誤差間に共分散を仮定した．各推定値をFigure 2に示す．適合度はCFI＝1.00，RMSEA＝0.00であった．Time 1の他者軽視と模倣志向の共分散が有意であり，Time 1の他者軽視からTime 2の他者軽視への効果，Time 1の模倣志向からTime 2の模倣志向への効果が有意であった．他者軽視から模倣志向，模倣志向から他者軽視への効果はいずれも有意ではなかった．

続いて，同時効果モデルについて検証を行った．同時効果モデルは，調査の間の期間が本来の因果関係が確認される時間よりも長すぎる場合に，双方向因果を検証するのに有効なモデルだとされる（岡林，2006）．他者軽視のTime 1からTime 2への効果，模倣志向のTime 1からTime 2への効果を仮定し，Time 2の他者軽視とTime 2の模倣志向の間の相互因果関係を仮定した．また，先述の交差遅延効果モデルと同様に，Time 1の他者軽視と模倣志向の間，Time 2の他者軽視と模倣志向の誤差間に共分散を仮定した．結果をFigure 3に示す．適合度はCFI＝1.00，RMSEA＝0.00であった．交差遅延効果モデルと同様に，Time 1の他者軽視と模倣志向の共分散，Time 1の他者軽視からTime 2の他者軽視への効果，Time 1の模倣志向からTime 2の模倣志向への効果のみが有意であった．Time 2の他者軽視から模倣志向，模倣志向から他者

軽視への効果はいずれも有意ではなかった．

以上，研究 3 で得られた相関係数について，有意傾向であった箇所を含めて研究 1，研究 2 と比較してみると，他者軽視と模倣志向の負の関連，自尊感情と一新志向，確立志向，全面変容志向，展望志向，模倣志向との負の関連については，3 つの調査データでいずれも確認された．また，交互作用は研究 3 でも確認されず，3 つの調査データのいずれについても見出されなかった．

他者軽視と模倣志向の関連について，縦断データを構成して因果関係の検証を行ったところ，他者軽視と模倣志向の間の因果関係は確認されなかった．Time 1 時点の共分散が有意であり，この時点での相関関係によって，他者軽視と模倣志向の関連はほぼ説明されてしまうと考えられる．

総合考察

本研究では，他者軽視と自己形成意識，自己変容の志向性の関連を検討した．有能感類型も視野に入れ，自尊感情との関連や他者軽視と自尊感情の交互作用についても検討を行った．研究 1，研究 2 では，大学生を対象に相関関係および交互作用の効果の有無を検討し，研究 3 では 2 時点（1 年間隔）の縦断データを用いて他者軽視と模倣志向の因果関係の検討を行った．

他者軽視と模倣志向の関連　他者軽視との関連で，研究 1，研究 2，研究 3 で共通して見出されたのが自己変容の志向性の模倣志向との負の相関関係であった．模倣志向の尺度項目を Table 7 に示す．先述のように，この下位尺度は「周りの他者に合わせて自分を変えたいという気持ち」から成る自己変容の志向性を測定しており，あこがれの人物を目指す憧憬志向とともに「他者」の大カテゴリーに分類されている（千島，2014）．あこがれや尊敬の対象である他者を目指す自己変容とは関連が見られなかったものの，他者軽視傾向の高さは，周りにいる人物や身近な人物への同調や模倣を避ける傾向と関連していることが明らかとなった．他者軽視と独自性欲求との関連を検討した高木（2010）は，正の相関関係（男性で $r=.36$，女性で $r=.30$）が見出されたことを報告している．本研究の結果は，この高木（2010）の知見と整合する結果であったと言えよう．他者軽視傾向で軽視される「他者」とは，身近な他者ではなく，世間一般の他者であることも知られている（高木，2009）．軽視する対象を，身近で具体的な他者ではなく，一般的で抽象度の高い他者にすることで，他者軽視が直接的な他者への攻撃になることを避け，他者からの

Table 7
模倣志向の尺度項目

・周りにいる人に合わせて自分を変えたい
・周りに合わせながら変わっていきたい
・身近な人のまねをすることで自分を変えたい
・自分の近くにいる人のようになりたい

報復や周囲からの非難を回避することが可能となる．同時に，実在する他者との比較を行わないことで，自己に対する客観的な評価を避ける効果もあると考えられる．しかしながら，他者軽視の高い個人は，自分が競争や序列化の社会に属しているとの認識が強く（小平，2012)，周囲にいる身近な他者もまた，時には競争相手として比較対象になることは避けられない．本研究で，模倣志向を避ける傾向が見られたことは，他者軽視が高い個人たちにとって，身近な他者と同等になることや，時にはそこに埋もれてしまうことを恐怖している表れでもあると考えられる．

では，青年期発達において，模倣志向による自己変容はどのように位置づけられるのであろうか．千島（2014）は，自己変容の志向性と同一性地位との関連についても検証している．同一性地位間で自己変容の志向性を比較したところ，模倣志向は同一性達成地位よりもモラトリアム地位で有意に高かった．この結果から，青年期の自我同一性の確立のプロセスにおいて，拡散から危機や役割実験を経て達成に至るまでに，模倣志向が同一性拡散地位からモラトリアム地位にかけて顕在化する自己変容の志向性であることが指摘されている．同一性の達成に向かうにつれて，青年自身が固有な自己の形成に重きを置くようになることで，模倣志向は減少していくと考えられている．一方で，その前段階にある，拡散や危機をまさに経験している青年たちにとっては，模倣志向は重要な自己探求のひとつであると言えよう．他者軽視が高い青年たちは，必ずしも自我同一性を達成しているとは限らない．例えば，伊田（2010）は，多次元的に自我同一性を測定する尺度（EPSI 及び MEIS）を用いたが，他者軽視との関連はほぼ見られず，唯一，他者に見える自分と本来の自分との一致の感覚からなる対他的同一性との間にのみ負の関連が見出されたことを報告している．他者軽視の高い青年が，モラトリアム地位にある場合，模倣志向による自己変容の追求がなされないことは，自己探求やその後の自己形成，自己変容の可能性を狭めている可能性は否定できない．高校生を対象に学業的援助要請との関連を検討した小平・青木・松岡・速水（2008）では，学業でわからないことがあった場合に，他者軽視が高いほど友人に対して援助を求めない傾向にあることも明らかとなっている．特にモラトリアム地位にある青年たちにとって重要となる，友人と助け合いながら自己に足りない部分を補ったり，周囲に同調し，模倣することで役割実験を行う点については，他者軽視は阻害要因のひとつであることが考えられる．

他者軽視と模倣志向の因果関係　また，一方で，上述のような関係はあくまでも同時点での相関関係として確認され，因果関係としては確認されなかった点も興味深い．この結果は，今回調査した青年期後期（大学生）よりも以前の因果関係によってほぼ関連が決まっている可能性を示唆しているとも考えられる．これまで，他者との比較を頻繁に行うような親の養育態度が青年の他者軽視を高めること（高木・木野・速水，2010）や，他者軽視が高く自尊感情の低い仮想型では，親との愛着関係において，恐れ・回避型の愛着類型に該当する個人の割合が高いこと（丹羽・速水，2007）が明らかとなっている．つまり，他者軽視や有能感タイプが乳幼児期から青年期前期までの親の養育態度や愛着関係の影響を少なからず受けていることが示唆されている．他者軽視と模倣志向の関連についても，より低年齢における検証が必要なのかもしれない．

今後の課題　本研究では，自己形成意識と自己変容の志向性における他者軽視，自尊感情の影響を検討した．研究3では1年間の縦断データを検討したが，他者軽視が青年期発達に及ぼす影響について明らかにするには，より長いスパンで検討する必要があると考えられる．特に青年期後期から進む段階的な社会参加において他者軽視の傾向がどのように影響しうるのか，今後さらに検討を行うことが求められる．

注

1　本研究はJSPS科研費26780366，17K04380の助成を受けた．また，本研究の一部（研究1）は日本青年心理学会第24回大会で発表された．

引用文献

千島雄太（2014）．大学生における自己変容に対する志向性の諸側面―人格発達，心理的適応との関連に着目して― 青年心理学研究，*25*, 85-103.

速水敏彦（2006）．他人を見下す若者たち 講談社現代新書

速水敏彦（2012）．仮想的有能感を測る　速水敏彦（編）仮想的有能感の心理学―他人を見下す若者を検証する―（pp.7-15）　北大路書房

速水敏彦・木野和代・高木邦子（2004）．仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），*51*, 1-8.

Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2007). Effects of age and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger. *Japanese Psychological Research*, *49*, 211.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review, 5*, 127-135.

速水敏彦・小平英志（2006）．仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研，*14*, 171-180.

伊田勝憲（2010）．仮想的有能感と心理社会的発達の関係：Eriksonの第I段階から第IV段階に注目して　日本教育心理学会第52回総会発表論文，466.

伊田勝憲（2012）．発達との関連　速水敏彦（編）仮想的有能感の心理学―他人を見下す若者を検証する―（pp. 91-101）北大路書房

小平英志（2002）．自己不一致の種類と自己形成の方向性との関連 日本社会心理学会第43回大会発表論文集 , 714-715.

小平英志（2012）．社会観との関係　速水敏彦（編）仮想的有能感の心理学―他人を見下す若者を検証する―（pp. 122-131）北大路書房

Kodaira, H. (2016). Changes in undervaluing others by Japanese university freshman and its positive effects on extracurricular activities. *31st International Congress of Psychology*, PS28A-14-341.

小平英志・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦（2008）．高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション 心理学研究，*79*, 257-262.

小平英志・小塩真司・速水敏彦（2007）．仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験―抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して― パーソナリティ研究，*15,* 217-227.

西平直喜（1990）．成人になること―生育史心理学から―　東京大学出版社

丹羽智美・速水敏彦（2007）．有能感の4タイプと愛着スタイルの関連　日本心理学会第71回大会発表論文集 , 62.

岡林秀樹（2006）．発達研究における問題点と縦断データの解析方法　パーソナリティ研究，*15,* 76-86.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
杉本英晴・速水敏彦 (2012). 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望 発達心理学研究, *23*, 224-232.
高木邦子 (2009). 仮想的有能感尺度（ACS-2）における他者評価―軽視される他者とは誰か　日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 23.
高木邦子 (2010). 仮想的有能感と独自性欲求―自尊感情との比較から― 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 38.
高木邦子・木野和代・速水敏彦 (2010). 仮想的有能感の形成に親子関係が及ぼす影響（1）―他者軽視傾向との関連―　日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 1024.
山本　力 (1984). アイデンティティ理論との対話―Erikson における同一性概念の展望―　鑪幹八郎・山本　力・宮下一博（共編）アイデンティティ研究の展望 I（p.21）ナカニシヤ出版
山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, *30*, 64-68.